

第2回関川流域フォーラム

平成18年10月29日
上越教育大学 講堂

1

関川流域委員会の設置の経緯と活動

- 平成9(1997)年に河川法が改正され、河川の整備計画を作成する際には、流域住民の皆さんの意見を反映することが必要になりました。
- そこで、関川流域の皆さんの意見を河川の整備計画に反映して、流域の自然や風土・文化などの特徴に応じた河川整備を推進するために、「関川流域委員会」が平成13年3月に設置されました。
- これまで11回の委員会を開催し、流域の問題点の理解を進めるとともに、どのようにして流域の皆さんの意見を河川の整備計画に反映していくか、その方法について議論を重ねてきました。

2

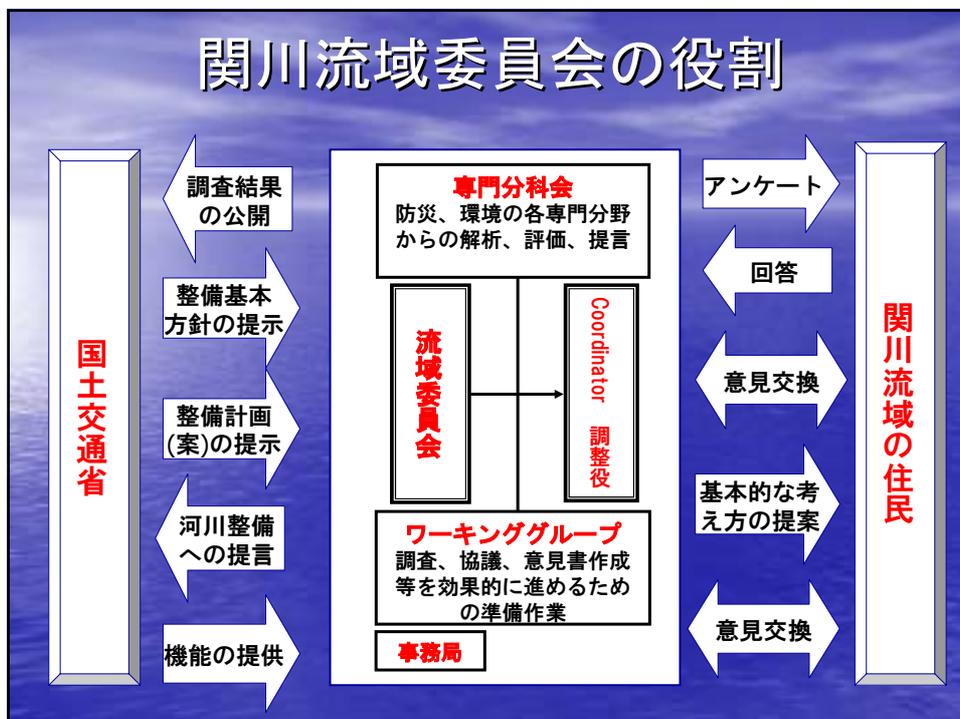
関川流域委員会の基本方針

できるかぎり多くの流域住民の皆さんの意見を
河川整備に反映することを重視します

5つの指針

1. 流域委員会は流域住民相互、流域住民と河川管理者の間の実質的な「調整役」である。
2. アンケートによる流域住民意識の把握と流域住民参加型協議による合意形成を目指す。
3. 「関川流域における水の基本的な考え方」を作成し、それに基づき関川流域河川整備計画の全体、個別事項への意見書を取りまとめる。
4. 流域住民による河川モニター制度の導入によって長期的に意見や提案を取り込む。
5. 本委員会、専門分科会、ワーキンググループの連携による効率的できめ細かな意見の集約を行う。

関川流域委員会の役割



関川流域委員会の住民参加活動

◆「関川流域委員会」は

みなさんの意見を聞いて、流域の自然や風土・文化などにふさわしい河川整備をしていくことをめざしています。



「川や水に対する意識調査」実施(H15.10)

自治会長さんへの説明会開催(H16.4, 7)

第1回関川流域フォーラム開催(H17.6)

自治会での車座意見交換会開催(H18.3-7)

川の見学会の実施(H18.8)

ワークショップの開催(H18.8)

第2回関川流域フォーラム(本日)

「川や水に対する意識調査」の目的

- 流域のみなさんの「川や水に対する意識」を明らかにし、様々な思いや考え方を整理する。
- 流域のみなさんが望ましいと考えている「関川流域における水の基本的な考え方」をとりまとめる基礎資料とする。

平成15年10月に
「川や水に対する意識調査」
アンケートを行いました。





どのような調査を行ったか？

【調査内容】

1. 評価構造調査

川をどのように感じ、
どう評価しているか？

2. 心理プロセス調査

川に対する知識や関心の
高さ、行動の積極性は？影
響を与える原因は？

3. 関川流域のクイズ

関川や治水・環境について
どのくらい知っているか？

【調査対象】

流域内13市町村*59自治会
(約3,300世帯)、有効回答率:82.4%

*H15.10月時点

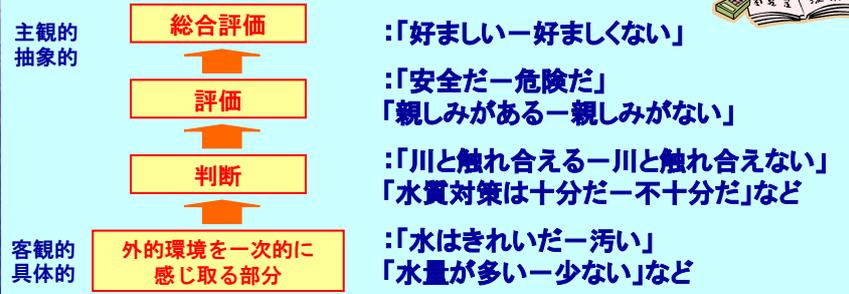


1. 評価構造調査

「評価構造調査」とは？

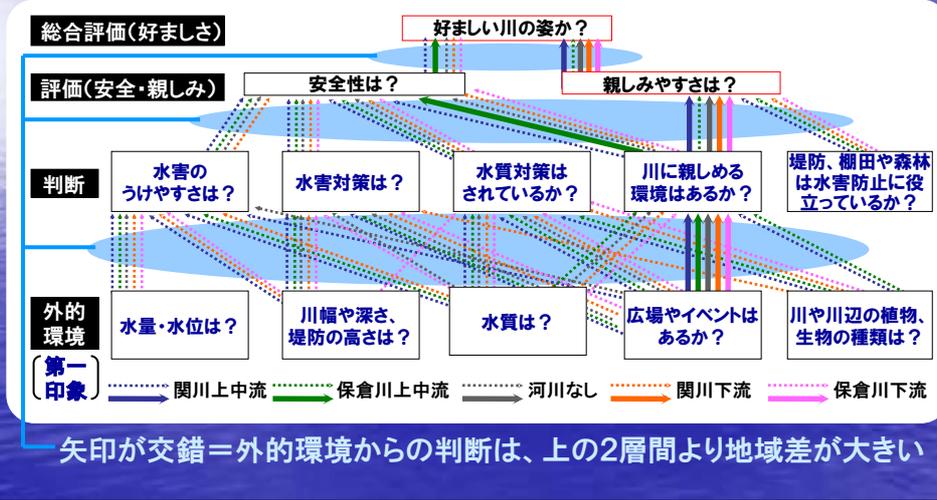
流域のみなさんは川をどのように感じ、どう評価しているか...？
評価構造調査では、以下のような4つの階層があると想定して
調査・分析しています。

○ 河川評価の4つの階層 ○



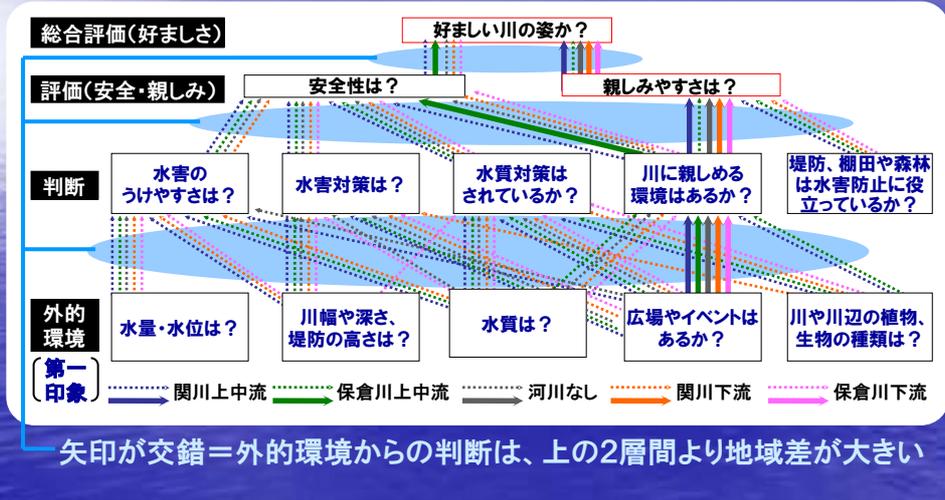
流域住民のみなさんの川に対する評価の過程には多少の地域差があるが、主要な過程は共通している。

最も強い経路(太い矢印の流れ)は4地域で共通



流域住民のみなさんの川に対する評価の過程には多少の地域差があるが、主要な過程は共通している。

最も強い経路(太い矢印の流れ)は4地域で共通



2. 心理プロセス調査

「心理プロセス」とは？

流域のみなさんの川に対する知識・関心・行動の積極性と、その原因は...？

心理プロセス調査では、以下のような「5つの心理段階」と「5つの心の働き」があると想定して、分析します。

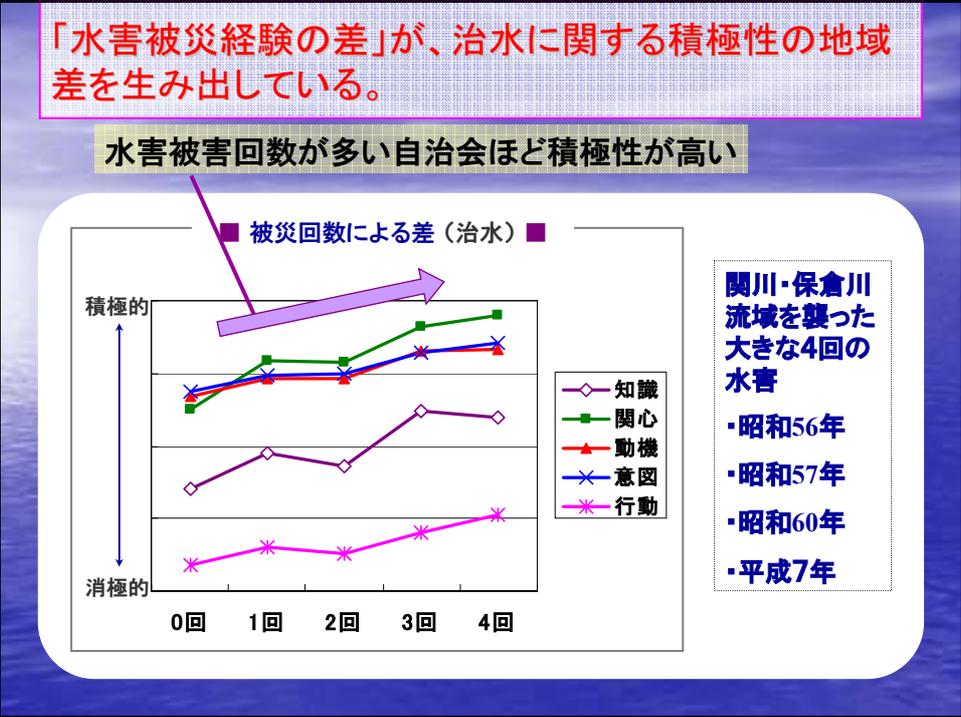
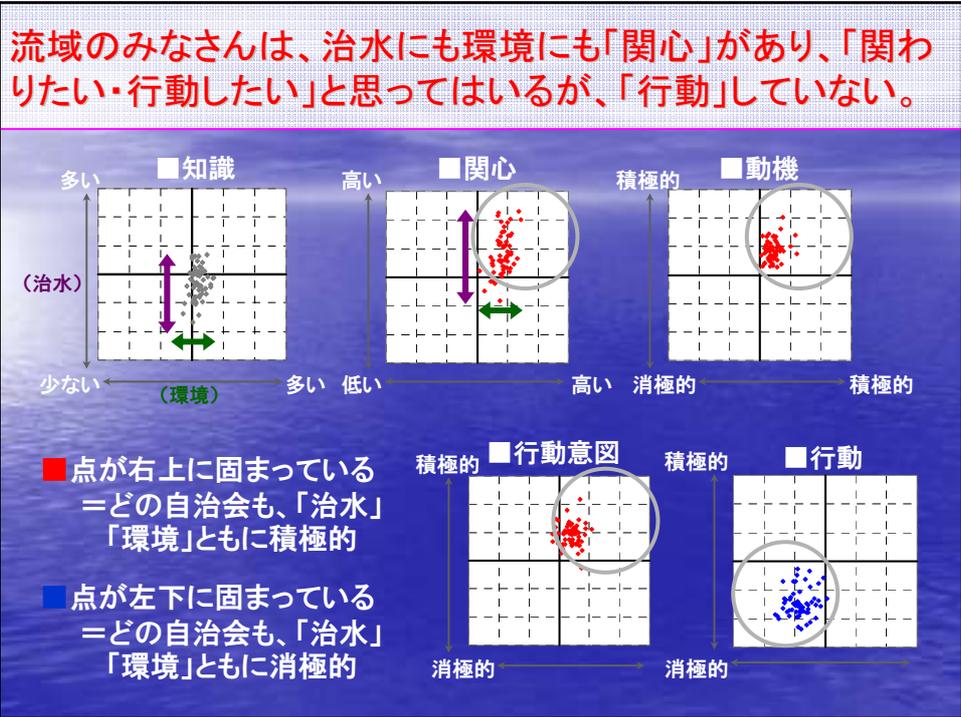
○ 5つの心理段階 ○

1. 「知識」: 対象を知っている段階 (見たこと・聞いたことがある)
2. 「関心」: 対象に興味・関心がある段階
3. 「動機」: 対象に関わりたいと思う段階
4. 「行動意図」: 具体的に行動しようと思う段階
5. 「行動」: 実際に行動している段階

○ 5つの心の働き ○

- このままでは危ないと感じる「危機感」
- やらなくてはいけないと感じる「責任感」
- 対策が有効であると感じる「有効感」
- 実行できる機会があると思う「実行可能性」
- 努力に見合った成果が得られると思う「報われ感」

影響



3. 関川流域のクイズ

川での行事や農業など、地域に関することはよく知っているが、認識違いをしている人が多いものもある。法律など専門的なことは、知らない人が多い。

■ 正解率が50%以上だった問題

クイズの内容	こたえ	正解率	不正解率	その他
関川は、過去に何度も大水害をもたらしたことがある。	○	76%	2%	21%
上越まつりの時、『御輿(みこし)の川下り』が行われるのは関川である。	○	71%	3%	26%
関川のどこで捕れた魚でも、食用に適している。	×	67%	4%	29%
「放水路」とは、川の水を田んぼに引き込むために作られたものである。	×	53%	14%	33%
関川の水質は10年前よりよくなっている。	○	51%	15%	34%

■ 正解率が20%以下だった問題

クイズの内容	こたえ	正解率	不正解率	その他
平成9年の河川法改正で、河川管理の目的として新たに「利水」が加えられた。	×	3%	29%	68%
関川の源流は妙高山である。	×	19%	54%	27%
関川の水を汚している最も大きな要因は、工業排水である。	×	20%	50%	30%
「レッドデータブック」は、絶滅の恐れのある野生生物についてとりまとめた本のことである。	○	20%	4%	76%

課題①「知っていること」と「行っていること」のギャップをなくす

流域のみなさんは、治水に関すること・環境に関することに対して「関心」や「行動したいという気持ち」を持っています。しかし、実際の「行動」の積極性は極めて低くなっており、流域のみなさんで行動を起こすにはどうすればよいのか、ということを考えていく必要があります。

そのためには...

- ① 川に関する情報をより積極的に提供して、「知識」を増やし意識を高める
- ② 水害への「危機感」を共有する



課題② 治水に対する考え方を流域全体で共有する

治水については、地域や水害被害回数による意識のギャップが大きく、流域全体の合意形成のためには、

- 水害による被害の実態や問題点などをどのような形で共有していくか
- 情報を共有した上で、地域ごとの考え方の違いをどのような方法でお互いに理解し合い、合意形成に結びつけるか—を考えていく必要があります。

そのためには...

- ① 流域全体に共通している認識や考え方を核に
- ② 水害への不安要素を軽減する・川への触れ合いを促進する



車座意見交換会レポート

実施期間：H18. 3月～7月

●目的：

実際にみなさんにお会いして、さまざまな地域における川や水との付き合いかたや問題点などについてお聞きすること

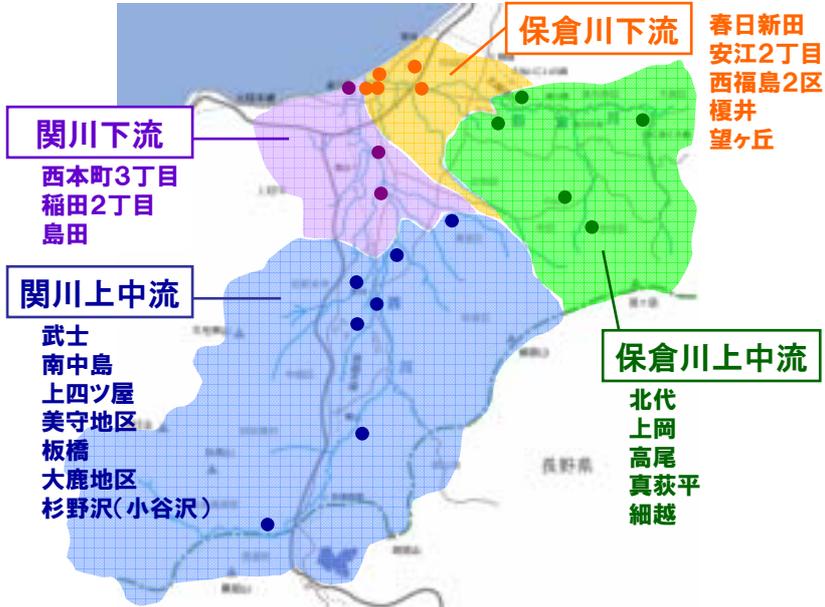


●内容：

- ① 流域委員会の説明、意見交換会の趣旨、河川法のはなし
- ② 意識調査の結果についての説明（流域全体の結果⇄各自治会の特徴）
- ③ 当該自治会・地域における川や水に関わる取り組みの現状と課題、歴史的経緯などをうかがい、意見交換

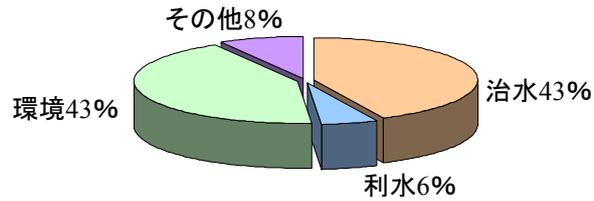


意見交換会実施自治会

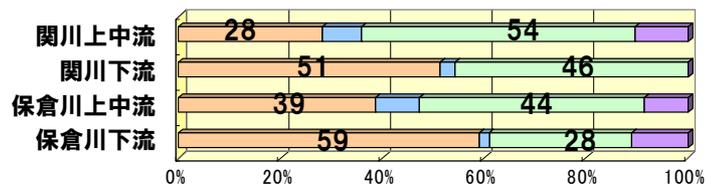


意見の傾向

◆ 「水害・治水」と「環境」に関わる発言が大半



◆ 保倉川下流では、「水害・治水」についての発言が多い



1. 水害・治水についての意見



- 水害後の河川整備により安全になった



- 下流域の低地では内水被害が続いている



- 上中流域では懸命に農地を守っている

- 内水被害が続く下流域の自治会では



- 田んぼが住宅地になってから水がつく



- 水防活動についての指導支援が欲しい

- 樋門の管理を適切にして欲しい



- 分水路に期待している



- 気象予報の精度が増したので、出水を予測し対応する

- 上中流域の自治会では



- 河川改修後、安全になった
- 河川内の雑木を適切に管理する必要がある
- 昔は必死に農地を守った（関川）
- 川は溢れないが、地すべりが多い（保倉川）
- 災害を防ぐため、自分たちで棚田や用水を管理している（保倉川）

2. 利水についての意見



- 田んぼにとって関川は命綱（関川下流）
- 矢代川は水が足りない。魚が棲めない（関川上中流）
- 稲作はため池を利用。循環装置で水を節約（保倉川上中流）
- 天水田に雪解け水や雨水を貯める（保倉川上流）

3. 環境についての意見



- 昔は水がきれいだったが、汚くなった



- 昔に比べて、魚が減った、
食べられなくなった



- 昔は川で泳ぎ、遊んだが今は遊ばない



- 川との触れ合い、親しみがなくなった

- 水質について



- 昔より汚くなった
- 生活排水が流れ込む（関川下流）



- 上流の下水道整備は流域全体のため
（関川上流）



- 合併浄化槽を設置し、きれいになって
きた（保倉川上流）



- 棚田が減り、地すべりで水が濁った
（保倉川上中流）
- 水が濁っていて汚い・イメージが悪い
（保倉川）

- 魚、遊び、川とのふれあいについて



- 河川改修後、川に親しめなくなった
- 流れが速くなり、水に近づけない
- 瀬や淵がなくなり、魚がいなくなった
- 生き物が棲めるだけの水の確保が必要
- 川に触れ合えないと、川への親しみや活動が育たない
- 広場など川と遊べる環境が必要である
- 子供たちや生き物のために清流を取り戻したい

4. その他の意見

- 昔はみんなで川を管理していた
- 住民と行政が話し合うのは難しい
- 水にまつわる過去の経験を伝える活動も重要
- 川に関心を持ってもらう活動をしていきたい
- 知識を得て広い視野で考え、行動したい
- 河川形状・調整池・分水路等わからないことが多い
- 山や川から流域全体を考えること

まとめ

- 河川改修で安全になったが、川から人が遠ざけられた
- 水とふれ合える、親しみのある川を取り戻したい
- 都市化が新たな水害を生む(内水被害)
- ハードとソフトを組み合わせ、被害を軽減することが必要
- 棚田には水を貯める働きがあるが、棚田を維持する人手が足りない
- 知識を得て広い視野を持ち、皆が協力して活動することが大切

川の見学会レポート

● 目的：

異なる地域に住む人々が一緒に川のさまざまな姿を見て話を聞くことで、お互いの地域を知り、理解すること。

実施日：H18. 8/19(土)
参加者：市民17名、委員7名



● 見学会のテーマ：

「つながり」

川は1本ではなく、広いところから「面」で集まる。

「多様性」

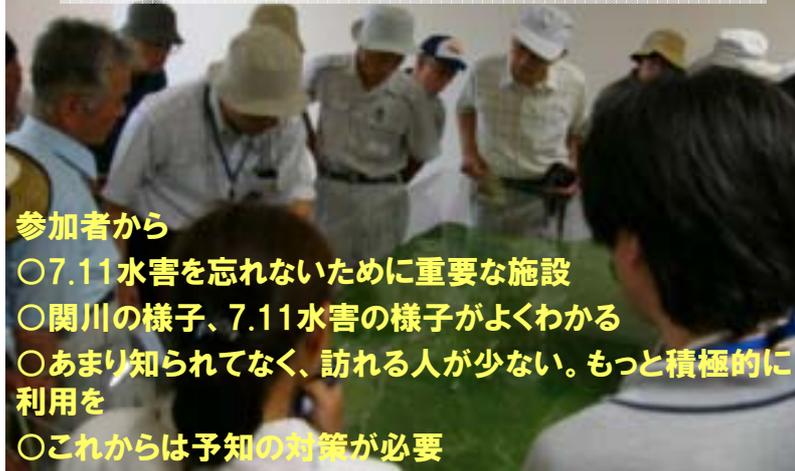
「面」の中にある、様々なちがひ。
上流⇄下流、関川⇄保倉川、市街地⇄農村、
洪水防止施設⇄親水施設、楽しいところ⇄怖いところ、 など。





2. 月岡防災ステーション

7.11水害で堤防が切れ、大きな被害を受けたところ



参加者から

- 7.11水害を忘れないために重要な施設
- 関川の様子、7.11水害の様子がよくわかる
- あまり知られてなく、訪れる人が少ない。もっと積極的に利用を
- これからは予知の対策が必要

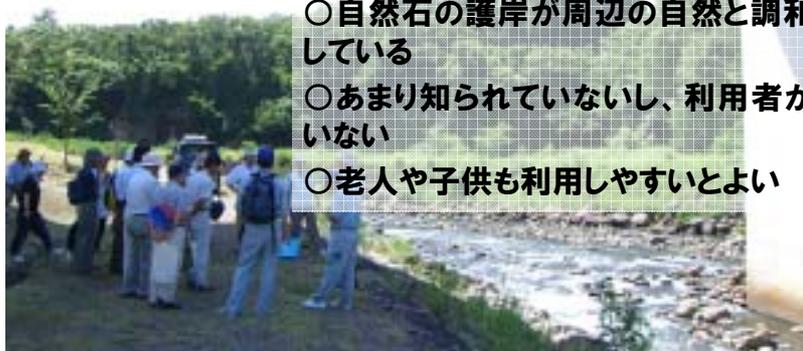
3. 妙高清流公園

自然石の護岸。地元の皆さんが管理



参加者から

- 関川上中流のきれいな流れが良い
- 自然石の護岸が周辺の自然と調和している
- あまり知られていないし、利用者がいない
- 老人や子供も利用しやすいとよい



4. 高田平野の田園風景

美しい田園景観は先人の苦労のたまもの



参加者から

- 頸城平野の景観がすばらしい
- 広大な農地と用水を支えてきた先人の苦労が偲ばれる
- この景観を維持するには流域全体を考える必要がある

5. 棚田

ダムの働きをする棚田は、ひところの1/3に。
人が減り管理ができない

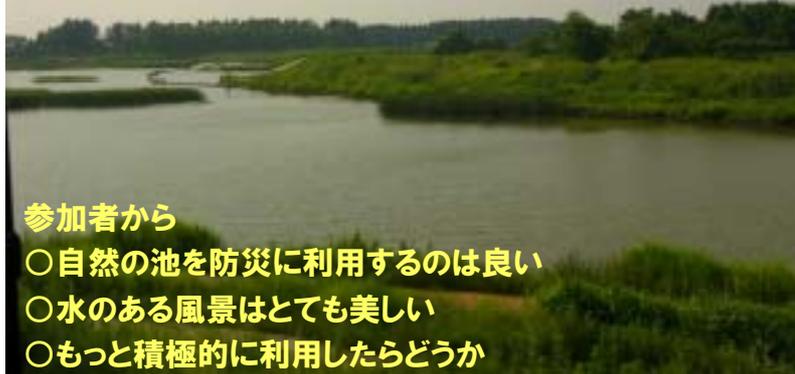


参加者から

- 自然と調和した棚田が美しい
- 棚田がなくならないようにしなくてはいけない

6. 保倉川遊水池

7.11水害後、一時的に水を貯めるために造られた



参加者から

- 自然の池を防災に利用するのは良い
- 水のある風景はとても美しい
- もっと積極的に利用したらどうか

7. マリーナ上越

災害活動を妨げる不法係留ボートを一掃するために整備



参加者から

- 治水とレジャーが共生する場所である
- 川を利用するマナーの大切さがわかる
- 下流らしい施設でよく整備・管理されている

8. 船見公園

関川と保倉川が合流し、日本海に流れ込むところ



参加者から

- 関川と保倉川の水の色の違いがよくわかり、川の上流、中流域の様子が思い浮かぶ
- 関川と保倉川の水質の違いなどを示す看板が欲しい

参加者の感想

- 1本の川には色々な姿がある
- 川の持つ多面的な顔を知った
- 保倉川と関川の水の違いを実感
- 清流公園では川が清流であることを主張しているようだった
- 上流はいいなあ。しかし、水質全国122位はショック(平成14年当時)
- 水の景観は人を和ませる
- 私たちは水の恩恵を忘れて思い上がっている
- 上流や下流のことを考えて水を使いたい
- いろいろな生き物と共生すべき
- 子供が川に親しめるようにしたい
- 棚田の保全を行っていったら
- 災害後に整備するのではなく、災害が起こる前になんとかできないか
- よその土地も知らなくてはいけない
- どういう川にしていくのがいいのかを考えなくてはならない
- このような活動を続けて地域で協調できれば
- 日本一の関川をつくるための第一歩

川のワークショップレポート

● 目的：

アンケート結果や車座意見交換会での意見、見学会での体験をふまえて意見交換を行い、安全で親しみのもてる関川・保倉川の川づくりの方向性を導き出す。

実施日：H18. 8/26(土)
会場：上越テクノセンター
参加者：市民15名、委員7名



● プログラム：

1. ワークショップの趣旨・内容説明
2. **グループ討議** (第1セッション: 上中流グループ、下流グループ)
「関川・保倉川の印象と私たちの川づくり」
3. **全体討議**: 第1セッションの議論の報告と意見交換
4. **グループ討議** (第2セッション: 洪水対策グループ、環境保全グループ)
「関川・保倉川の洪水対策と環境保全」
5. **全体討議**: 第2セッションの議論の報告と意見交換
6. **全体討議**: 全体のとりまとめ

川のワークショップレポート

グループ討議：第1セッション 「関川・保倉川の印象と私たちの川づくり」

■ 上中流グループ

<上中流・下流の役割>

- 棚田を離れるときは植林するか、水路をつくる
- 下流から草刈りにきてほしい

◇ 昔と今

- ・ 川で遊んだ、泳いだ
- ・ 河川敷でかぼちゃを作って食べた
- ・ 昭和45年頃まで、中央橋に鮎がいた

◇ 治山・治水

- ・ 山の荒廃を防ぎたい
- ・ 川の中の樹木が流れを阻害している
- ・ 川が直線化され、水が一気に流れる

◇ 提案

- ・ 環境重点整備地域と治水重点整備地域に分ける
- ・ 農業用水の必要量の見直し
- ・ 下流の浚渫より上流の土砂流出を防ぐ

◇ 環境(生物・水量)

- ・ 蛇行もよかった
- ・ 矢代川は夏に水が流れていない
- ・ 頸城頭首工から魚が上がらない
- ・ 魚の種類が変わった

◇ 水質

一時よりよくなったが、月岡のあたりで排水が集中して関川に流れ出ており、魚も臭う

◇ 私たちにできること

- ・ 一人一人の節水
- ・ 議論し関心を高める
- ・ ごみ拾いから徐々に
- ・ 山の保水力をつける

グループ討議：第1セッション「関川・保倉川の印象と私たちの川づくり」

■下流グループ

◇昔と今

- ・昔は水を怖いとは思わなかった。河川敷に民地があり、住民との接点があった。海には波打ち際まで広い砂浜があった
- ・今は川に近づく気がしない。環境ホルモンが気になる。無理な都市開発は内水問題をおこす

◇好きなおとこ、良いところ

- ・田んぼや橋などを含んだ川の風景
- ・波をイメージした欄干など、橋のイメージがよくなったこと
- ・プレジャーボート対策がされたこと

◇困った問題

- ・大雨のとき天王川があふれる
- ・ヘドロ状の土砂が堆積し浚渫が必要。土砂堆積のため、神輿の川下りが中止になったことも
- ・上中流を含めたゴミ問題
- ・治水の問題が解決しないと環境問題の議論に入れない

◇上流への要望、共にやること

- ・上流から適度な土砂供給が必要
- ・水を汚さず、一定量以上流して
- ・無理な土地利用、過度の河川改修は下流で一気に水が出るもと
- ・遊水池の利用を
- ・棚田・森林を上下流一体で保全
- ・祇園祭が開催できる関川に

グループ討議：第2セッション「関川・保倉川の洪水対策と環境保全」

■洪水対策グループ

◇問題点の洗い出し、その背景

- ・土砂堆積の問題
棚田が荒れ、土砂で埋め尽くされている。地すべりが発生し、下流に影響。砂防事業と河道管理計画の整合が必要
- ・土地利用と水害
田んぼの宅地化、商用地化により内水害の危険性が増している。内水氾濫地が宅地化されて
- ・農業管理の影響
農地の水管理の高度化により、遊水機能が低下しているのでは
- ・河川工事、管理の不整合
県⇄国、河川⇄砂防の縦割りの弊害
- ・気象の問題
一気に強く降る雨の量が多くなっている

◇これからの洪水対策、行政に期待すること、私たちにできること

- ・今の河川計画では集中豪雨対策が考えられていないのでは。支川の本川合流部でのポンプ排水が大事
- ・災害時の樋管、樋門などの施設管理、情報の住民への周知徹底
- ・水田に水を効果的に貯めることを考える（住民相互、農水省と国交省の相談が必要）
- ・街の人も、行政頼みではなく農山村の人と相談しながら対策を考えていく
- ・祇園祭を象徴とした川づくりを行い、防災力を高めたい

グループ討議: 第2セッション 「関川・保倉川の洪水対策と環境保全」

■環境保全グループ

◇問題点の洗い出し

- ・水・水量・水質
 - 環境ホルモン
 - 下水の浄化基準
 - 排水口の集中
 - 最適河川水量の把握
- ・ゴミ
 - 河川敷への投棄
 - ペットの排泄物
- ・その他
 - 河川利用が少ない
 - 川へ安全に降りられない、水量が多い
 - 野鳥を守る会との折り合い
 - 夏季水量が少ない(儀明川)
 - 冬期の排雪利用

◇要望

- ・短期的: 川への排水の水質改善/長期的: 教育やモラルの向上
- ・河川敷にベンチや休憩所整備
- ・中上流は環境面への配慮、自然型川づくり。下流ももう少し自然に近い形に。使える魚道の整備も
- ・堤防上を道路にし、川を見る機会を増やす
- ・神輿の川下りができるよう中央を深くする
- ・イベントなどで行政と協力・協賛するしくみ
- ・河川沿いの植樹
- ・埋没林の活用
- ・Jプランの実現

◇提案

- ・学校区単位で川と接する機会をつくる
- ・川へ行く機会を増やす(→川への関心・意識が高まる)
- ・マナーの徹底
- ・住民意識向上のためのルール作り
- ・川原のゴミ拾い

全体討議: 全体(午前・午後)のとりまとめ

◆共通の話題

- ・昔は、集団で川で遊んだ・濁った川=汚いという認識はなかった
- ・棚田・山林の保全の必要性
- ・土砂に関わる問題・砂礫が減って泥が増えた、海岸線が狭まっている
- ・「神輿の川下り」・安定的継続のためには、いろいろな要素が含まれる

◆点から線へ、線から面へ...そのためには

- ・流域の住民が相互に話し合う場をもつ(土地利用の改変など、面的に捉える)
- ・行政の縦割りの壁を崩し、横の連携をとる必要がある
- ・長期的に教育を進めていくことが大切

◆上下流、都市住民と農山村住民と一緒に考えていくために

- ・川に行く機会を増やし、川を総合的に考える目を養うことが不可欠
- ・川に行く機会は自然に増えるわけではないので、機会を増やす工夫が必要
- ・いろいろなところを見る機会を設ける、イベントの活用が鍵

参加者のみなさんの感想から

◆子どもたちに教えていく、伝えていくこと

- 子どもを川に連れて行くことを、これからも続けていきたい。自分にできるのは、親として子どもに教えていくことかな、と思う。
- 妙高山の麓の美しい自然に育まれる子どもたちに、大人の知恵と愛をもって、川の怖さ、問題を克服することなどを伝えていきたい。
- 排水について、出口よりも入口の段階で考えなければならない、というのはその通りだと思った。教育の問題などは子どもの頃からやっていかないと。
- 最近の若い者はゴミを捨てる、と言われて寂しかった。友人にも注意したい。

参加者のみなさんの感想から

◆上流から下流まで、さまざまな要素を一体的にとらえること

- 下流の港から上流まで、みんなが川に親しめるようになればと思う。
- 防災の問題にしても、用水路などと一体で見て考えていかないといけない。
- 自分は上流の者だが、下流の方とお話しして、下流に土砂を流して申し訳ないと思っている。
- 下流域にこんなにたくさん問題があるのか、ということを知った。川はこうあるべきだということから議論を始め、それに向けてどうするか、という進め方をしていくべきだと思う。

参加者のみなさんの感想から

◆住民自らが考えなくてはいけない

- 行政に頼んでもすべては解決しない。
自分に何ができるのか、自分たちのまちは自分たちで何とかするんだ、という思いで、住民自らが考えなくてはいけないことをつくづく感じた。